

に開催されていた無審査自由出品展覧会だ。五〇年代後半から徐々に前衛的な作品が増え、美術館の枠に収まりきらなくなり一九六三年に幕を閉じる。ゼロ次元や、赤瀬川原平が加わっていたハイレット・センターなど、多くの前衛芸術家を生み出した。

Kさんは学生時代、赤瀬川原平の『東京ミキサー計画』（PARCO出版局）に多大な影響を受けたという。この本は詳細な写真記録と独特の語り口で、ハイレッド・センターの活動や、六〇年代前衛美術の魅力を伝え、八〇年代の美術界にも大きな影響を及ぼした。要するに、この「ゼロ」プロパガンダ展も、Kさんの前衛美術活動の一環だったのだ。

### 毛沢東のタペストリー、レーニン像との出会い

一九九二年、大学生だったKさんは春休みを利用して初の一人旅を敢行した。大阪から船で上海に渡り、北京からシベリア鉄道でモンゴルを経由してモス



ははりに  
さひの  
まの  
か  
の  
る  
大  
手  
の

これをきっかけに、猫の名前も「レーニン」、メールアドレスにも「Lenin」の文字が入るなど、レーニンが彼の人生を支配し始める。そういえば訪問時、マンシヨンのポストにも「Lenin」の表札があり不審に感じていたのだった。

モスクワの屋台では他にも、世界の指導者のマトリョーシカ人形、タペストリー、バッジなどを購入した。一九九三年まで存在したV・I・レーニン中央博物館では公式図録も購入したが肖像画のポスターはどこも売っていなかった。

ところが最終目的地ハバロフスクに到着すると、旧ソ連時代のうらさびれた雰囲気はまだ濃厚に漂っていた。これはと



プロパガンダは帰国後中華人民にならなくて車のミラーに下げて運転していた

クワへ。最後はハバロフスクから飛行機で新潟へ帰るといふ壮大な旅程だった。そのとき、北京で立ち寄った毛主席記念堂で運命のタペストリーに出会う。

「何かふざけた土産を買おうと思って、この〈元首モノ〉を欲しくなっちゃった。家に貼ったら面白いし、アンディ・ウォーホルのシルク・スクリーン作品『マオ』と並べて飾ってみたい！ って」

おそらく機械織りで、裏返すと裏地がネガのようになっていたため、その後、裏側を飾ったりもして楽しんだ。そしてモスクワに着いたKさんを待

とゴルバチョフの肖像画が販売されていて、歓喜しながら購入した。最初の旅でここまで調達できてしまったのは、これはもう逆らえない運命だったのかもしれない。

### 〈元首モノ〉を集める世界一周の旅

その後、Kさんはアメリカに留学する。コレクションを部屋に飾っていると、面白がったルームメイトがエディンバラ



ち受けていたのは、ソ連崩壊直後で投げ売られていたプロパガンダグッズの数々だった。すでに北京で洗礼を受けていた彼にとつて、それらはもはや「買わなきゃいけない」ものへと変わっていた。

そのとき、道端の屋台で数十ドルで手に入れたのが小さなレーニンの胸像だ。後にこれを使ってコマ撮りアニメを撮り、自身も出演する自主映画「レーニン」を制作、イメーτζフォーラムで上映した。

「だからこれは凄まじく思い入れがあります。すべてにおいて、このレーニンが僕の人生に関わってる！」

公爵フィリップ王配の肖像画をプレゼントしてくれた。それはこれまで集めた「土産物」と違い、イギリス領事館でもらってきた初の「オフィシャルもの」だった。喜んで盛り上がった挙句、その友人に後押しされてプロパガンダグッズを集める世界一周の旅を企てる。飛行機でイギリスに渡り、陸路でユーラシア大陸を横断し、船で日本へ一時帰国するという、これまた壮大な計画だった。